台 湾 の 出 会 い

「出会い」は時に劇的である。人は人の行いに感動し心を動かされる・・・。

はじめに

『台湾のよさ発見』それが僕らの合い言葉だった。

平成十年四月。期待に胸を膨らませ台湾・高雄にやってきた。高雄日本人学校の社会科教師としての日々が始まったのだ。

「海外で生活することってどんな感じだろう・・・。」とワクワクする気持ちが大きかった。中学部一年生担任としてスタート。新鮮な驚きの連続で、着任以来、毎日が興奮状態だったことを記憶している。

中学の社会科担当とともに「高雄タイム」という現地理解教育の責任者を任され、とにかくあちこちに出かけ、少しでも多くのものを吸収しようと必死だった。ダメでもともとという精神で「会ってみたい」と思う方々を訪ねたりもした。僕らの合い言葉は「台湾のよさを発見しよう。」これは学校の現地理解教育のテーマだけでなく、台湾で生きていく自分自身の合い言葉でもあった。

『人に迫れ！』ことが大切だとわかってきた。

平成十一年度、中学部の総合で、八田與一を取り上げることになった。日本ではあまりなじみのない名前だが、ここ台湾では、「烏山頭水庫をつくり、郷土を開いた人」であり、「今も台湾の方々から尊敬されている人」として有名である。もちろん、高雄日本人学校でも毎年のように学習を進めてきている。「與一」を知るのではなく、「與一から台湾を知る」というスタンスで取り組むことになった。テーマは「巨大な人、八田與一に迫れ！」

生徒が調べていくためには、教師の事前準備が不可欠である。そのため、何度も台南に足を運んだ。今もダムや用水路を管理している嘉南農田水利会に赴き、実際の用水路や管理所を案内してもらった。更に、中学部スタッフ全員による烏山頭水庫周辺の與一が元住んでいたところへの突撃取材を敢行。なんと、八田與一を直接知る生き証人陳夫妻と出会うことができた。奥様は、與一が完成後のダムの様子を定期的に視察する際に身の回りのお世話をする係りだったそうである。「やっぱり、動いてみるもんだねぇ。」と痛感した。

まさかと思っていた「生き証人」の登場は、一連の学習を大いに盛り上げることとなった。生徒たちは、実際に「生き証人」に会えたことで、「八田與一」がものすごく近い存在になったようである。そして、台湾のことを学んでいく意欲が高まっていったのである。

この活動を通して、実際に人に会い、話を聞くことの大切さを実感することができた。

実は我は、日本でも『八田與一』とつながっていた？

更に驚きは続く。その後、台湾に遊びに来た「八田」姓の教え子は、「與一」と同郷で血縁関係にあり、八田の屋敷や墓、今町などの写真を持ってきてくれた。あまりの偶然に、不思議な縁を感じた。「與一」との距離がぐっと縮まったような気がした。

『台湾での出会い』シリーズは、ふとしたきっかけから始まった。

「台湾での出会い」というシリーズは、三年目の五月。「八田與一との出会い」を書いたことに始まる。

八田與一慰霊祭、記念講演、台南市長公邸での晩餐会に参加した帰りのこと。「今日の様子をプレスに書いてくれないか。」と現地日本人会の広報誌「高雄プレス」への執筆を勧めてくれたのは、竹下交流協会高雄事務所長と中澤日本人会長（当時）だった。その日の興奮は、一週間近く続いた。記事は興奮がさめないうちに一気に書き上げた。

『與一』との出会いは新しい出会いを生んでいった。

八田與一の慰霊祭は、彼の命日に、彼と彼の妻（外代樹さん）の冥福を祈るもの。これまで台湾の人々の手でずっと続けられてきた。三年目にして初めて参加する機会を得たことは本当に

幸せだった。そこには、輿一を偲ぶ多くの人々が集っていた。輿一の地元金沢からやってきた日本人も多数参列していた。もちろん、「生き証人」陳さんや台日交流促進会の黄天横さん、嘉南農田水利会の方々もいた。「台湾を愛した日本人」を著した古川勝三先生（元高雄日本人学校教諭・現愛媛県公立中学校長）に会うことができた。何度か電話したことはあったもののお会いするのは初めてだった。その他にも、輿一が去ったあとの烏山頭水庫を守った輿一の愛弟子中島力男技師、開局十周年の記念番組の取材に訪れたテレビ金沢プロデューサーの上島大助さん等に会うことができた。

中島さんの取材をする上島さん

古川勝三先生の記念講演の進行は蔡焜燦さん、主催は許文龍さん。豪華キャストだった。必死にビデオカメラを廻しながら、自分自身がテレビの一場面にいるような錯覚を覚えた。そこでは、輿一に関わる多くの人々の想いに触れることができた。

とにかく充実した一日だった。

『輿一』と出会った興奮から『台湾での出会い』シリーズが生まれた。

輿一についての文章を書いていくなかで気がついた。輿一のおかげで沢山の人に出会い、それぞれの「想い」に触れることができた。「出会い」は新しい「出会い」を生む。「想い」は生きている。そんなふうに感じるようになった。

輿一に関わる「想い」をつなげたい。これが「台湾での出会い」シリーズとして形になっていったのだった。こうして人の深い想いを探る旅が始まった。その原動力となったのは、輿一との出会いの「興奮」だった。

『日本は台湾の育ての親』林先生の言葉が頭の中をよぎった。

第二弾として書いたのは、林先生の話。「日本の若者はきっと台湾と日本のことを良く知らないだろうけど・・・。」

林先生は、どうにか「台湾の想い」を日本の若者に伝えたいと思っていた。「台湾の出会い」「台湾の想い」を書いていくうえで私が真っ先に書いてみたかったのが林先生だった。林先生には既に何度もお会いしていたが、いざ文章にするとなると、ちゃんとした取材が必要だった。

「今の気持ちを私に託していただけないでしょうか・・・。」林先生は快く引き受けてくれた。林先生の話はすごく楽しかった。波瀾万丈な人生。信念を失わない力強さ。話を聞き、文章を書いていると、又興奮状態になった。印刷された高雄プレスを林先生に贈った。林先生はものすごく喜んでくれた。「私のことを紹介してくれてありがとう。松井さん、あんたこれからも台湾の想いを日本に伝えて下さい。」林先生の「想い」に触れたのだ。

その後、元台南二中（現一中）第19期生文集編集長の陳俊郎さんから電話が来た。「林先生の話を私たちの文集に載せてもよろしいでしょうか・・・。」

「想い」は広がっていった。

『出会い』の流れは続く。

三作目以降、孫文、楊さん、蔡さんと書いた。年輩で日本語世代の方々の話は、人生経験が豊富でとても興味深いものばかりだった。残していかねばならない深い「想い」に溢れていた。書いていくうちに、気持ちが高ぶっていった。

そして、第六弾。許文龍さんのところで、なぜかみんながつながった。「輿一の想いをつなげていきたい。」という願望は、図らずも実現したのである。

この「出会い」の流れはこれからも続く。「出会い」は単独ではない。実は相互に深く関わり合っているものなのだ。

（平成一三年二月九日……筆者）